

東北新報

印刷所 盛岡市南町五九
發行所 盛岡市南町五九
電話 二一〇
一月 二十元
一月 二十元
一月 二十元

我郷土を想ふ 其三十号

郷土第一の都會たる平
市も東北一とも云ふ大
公會堂が足事に出来上
り 去る三日を以て目
出度く落成式を上げた
誠に喜ばしき事である
其れに付けても係りの
委員連中も大庭ではな
かつたろうと
而して市民からは直接街
燈はなくとも市当局か
ら何かの意味で表彰
されたものであろうか
それとも自己本位では一
向に難味か薄いかも知
れぬが自己の名譽を看
板にするやうな人では
眞平だよ 然し一般市
民の聲が其人に集まる
時には確かな人と見て
銀杯位はあたりまいで
はあるまいか
市民且各町村民諸君よ
互に生きゆくには衣食
住の三つの内第一に衣
食する事が先か又着
る事が先かすべきか
又住む事が先かすべ
きかである

其二つの衣食住の
第一の様に余は思ふ
故に其衣食について諸
賢と共に話して見た
と思ふ
今や我國は國民總動員
の旗幟なるが故に我等
は如何にして此時局に
相應するかと云ふ事に
なれば唯自身一家が共
力して 天皇陛下に
盡忠の誠を顯はすにあ
るもので統後の我々は
我天職を完ふするに外
なりと思ふ
我郷土民よ 其日其
日の暮しに於てうそい
つはりの働きては其れ
はいくら働いても決し
て正義とははなぬ 社
會對しての通信機關
たる新聞が筆の先で
ばかり日本國民たるの
ではだめだ 其行へか
正しくなければならぬ
チンドン屋とのみあつ
かはれて社會から捨て
られものとなつて誤り
る國策にあはぬ事と存

るのである
筆は自己の立場に入つた
か我等郷土民として自己
本位を自他共に進め行く
事だ それには郷土の中
心たる平市民の考か
根本的に改造され
なければ我郷土の發展は
進めるばかりでなく人心
加減にこそなる人ばかり
多くなり遂にはとりかへ
しのつかぬ精神の病が身
の病となるかも知れぬ
近頃医師のわからぬ病氣
が出来てきて病名もつけ
られず其の儘に死する
人もあるが如きは其
人の周囲並に其人の行か
第一の原因となる事を最
も多い振だ 又我等郷土
民は人に思を掛けて後
に我々が其人の自由を云
々するが如きは誠に浅は
かな考へを持つ人が多い
毒と思ふ 又一つには自
分の名譽職を並に着て何
事にも巾さかき過ぎる
癖だ 其名譽職が果して

神精なる歳の
名譽職なりや
にある。平市
の立ち起きは
平市會議員の
胸三寸にある
のではあるま
いか 其市議連中が我
職責を並に着て何事も
市倉に望むとするなら
は市民の望む面を度
だかその處を東北人
の義侠心を以て市の發
展を計つて貰ひたい
のその点に就ては
名譽職は
大漁港文
あつて小野所長の下に
各町會議員を始め役場
の道部と云ふ頃で各其
の譽職の人か我れを捨
て町を起す一念より表
裏なき且つ人情味の
深き事は實に宜しきを
得て居る 殊に役場の

課長連が一丸となり町
長と主として町制に沿
動しよき統後の護りと
固くする振は実に他町
村に優るとも劣らず又
學校とても全く西山
校長を主として職責一
同の生徒に對する教育
は是亦自覺ましいもの
がある
保護者として同じ愛
児を托して居る感念か
ら先生を尊ぶ信念は誠
に大海を前に見る神精
さか目前にありありと
映する様で 平市の父
兄等が出来ぬ處である
父兄の事で思ひ出した
か吾人は一昨午平第一
の父兄會にと望んだ際
を一寸申上げて見たい
と思ふ
頃は一昨午の七月の初
旬で、暑さは相當に暑
かつたが心ばかりの禮
物で出かけ
た、時間
午前八時頃
で第一の講
堂は満員を
呈した
開會の序が
校長の保護
者に對して
と云ふ題で
一時静寂の
あつた

其話の内容は左の通り
であつた。一人の男生
徒が受持教員を示した
綴方の問題に對して
私は如何すれば
よいのか
と云ふ自由な綴方を作
つて来たのである
其内容はこうである
生徒の家は十二才を過
に五人の小供ありて身
は貧乏で父は出工で毎
日不在、母は他人の光
澤針仕事をして家計を
助けて居る有様で長男
の子供が問題の主人公
と云ふわけだ、或夜
の事長男が弟妹を床に
寝かせ自分はその側で
學校からの綴方の問題
を作るべく其仕度にか
つた時父親曰く「お
前も早くお休みと一喝
され仕方なく床にぞく
り鉛筆と紙を手にして
床の中で考へ中計らず
も隣り座敷で父母のひ
そひそ話を耳にしたの
でなんであらうと子供
心に聞けば意外にも明
日の米が無いか如何する
かとの話なので子供は
考へた、此の鉛筆も
紙も皆父母より買ひて
貰ひし品一枚の紙でも
一本の鉛筆でも無駄に
は使へぬ、その事學校
を退學して他人へ奉公
に行つて父母の手助を

するか、せめて尋常
大けは卒業したいも
のだな
私はどうしたら
よいのか
といふ綴方を作つて
來て受持先生と話を
したといふ話であつ
た
篠山校長曰く、父兄
の皆何卒家庭の苦
しい事情は子供に聞
かせないで下さいと
云つた
も一つは女生徒の話
で女は相當大きくな
つたら家遣を手傳は
せて下さい、それに
就て一つの話がある
或る商家にて手不足
の家庭であつた事だ
か一人娘の事で高等
二年にもなつて何一
つ家事に使はず娘も
よい事にして毎日學
校歸りに友人の家へ
遊び込んで来たもの
だか或夕方の事であ
つた、母親が大根と美
事の線切りして居る
のを見て娘が好機に
にかられ、お母さん其
大根を切らせて下さ
いと母親にせかめは
母曰く、手を切るとい
けないからやめなさい
いと云つた其内にあ
店にお客が來たる爲
め母は手を離してあ

第六回 讀者會
秋季映画大會御禮
我社主催に依りたる四日夜の
映画大會に就て多大の御後援
に預り爲めに盛大に終了致
しました此に備に吉々様御
声援の賜と深く感謝の意を表
はるものであります
取敢て紙面御禮申述べ次第で
す
昭和十三年十月八日
東北新報社 敬告

店に行つた後で娘が其
階にと大根を切り始め
たら母親の云ふ如く手
を切つて白い大根を赤
く染めたので驚いて外
に出た。

本社として 我郷を應召軍人名譽ある戦
歿者墓地を所在地等と指定しました
諸賢は努めて墓参し英靈に對し感謝の意
を表はされたいことを切望して已みません

寺名 戦没軍人
良善寺 故歩大尉 古泉切哉
大寶寺 故陸歩上軍兵 大山徳直
明賢寺 故陸歩軍曹 丸山芳春
性源寺 故陸歩上軍兵 高橋 正
性源寺 故陸歩一等兵 菅本利男
性源寺 故陸歩中尉 金成嘉太郎
安養寺 故陸歩上軍兵 長瀬徳男
性源寺 故陸歩伍長 半谷壽長
大寶寺 故陸歩上軍兵 大久保善郎
以上平市、分

妻として女性としての
心得は如何すれば宜し
いかと先生に尋ねたと
云ふ話があつた。

橋山校長曰く、女の子
供には相應した仕事を
手傳はして下さいとの
話で、最後に日く皆振
舞ふ子供に對しては、
各自に受持先生が、
父兄以外の方は受持先
生のお出でを願ひま
す。云ふので吾人は自
分の子供が不成績の子
供を持つた爲め、おどお
どしながら受持先生の
處へ行つて見て驚いた。
校長先生の講話の時
には千余も集つた、
又父兄が何
と高等科の
一組へは何
と三人の父
兄で然る二
人の父兄は
優秀生の父
兄のみ、余
は少くも、
まり悪かつ
た位だつた
頃には七月初
旬とは云ひ
暑さの事故
御婦人達は
各自に美を
尽しての金銀づくめの
豪華振りで而も衣掌の
展覧会の如き杜撰さか
あつた。それ以来吾人
は平の父兄會には行つ
た事がない。今では少
しく改革されたと聞く
が、其際校長にも其事を
語つたが、校長として
同感であつた。

諸賢より、學校と家庭
と相和して教育でなけ
れば、眞の義務教育では
ないでせうか
それに引かい小名安堂

校の父兄會を見學した
か月の旧金との相違で
突にお話にならず

外観のみでなく
信実に至るまで
ラダ。(續く)

内科・外科 (内臓外科)
花柳病科・皮膚科
小名安堂町中町
石井醫院
電話十八番

賣事
酒場
余ねた
レストラン
サロ
町田・平
二五三電

洋品は
つるや
平市四丁目 電話二四〇番

内臓外科 レントゲン科
一般外科
北川外科
(血液検査毎日)
デキマス
平市新町(舊橋本醫院)
伊藤博士 北川芳次
大正火災保償株式會社
三井生命保償株式會社
代理店

磐城水産工業株式會社
魚市場
電話一四四番

磐城セメント特約代理店
良品廉賣に勝る商略なし

釜屋商店
電話部
專用電話六三三番
磐城・平市五丁目
電話九番九九番
東京振替口座一〇九五六番

清世酒
清世酒
元發店
本店水清
番六路電・町次名小

株式會社
湯本無盡
電話四七番

平南町
看護婦附添婦
御急命に應じます
平看護婦會
清野キヨ
電話三〇七番

派出看護婦家政婦の求めに應ず
隨時生
徒募集
樋口産婆看護婦學校
……湯本町……

大
店商介彰山横 店理代ヤイトスチッパ
目丁三町本市平 番六番四九・話電